



令和3年(2021年)度

拉致問題に関する 授業実践事業

共催：北海道教育大学



拉致問題に関する授業実践事業の概要

目的

拉致問題の解決のためには、これまで拉致問題について触れる機会の少なかった若い世代への啓発が重要な課題となっています。このため、教員を目指す大学生に、授業の指導案を作成してもらい、模擬授業を行ってもらうこと等を通じて、拉致問題の重要性への認識を深めてもらうとともに、拉致問題の教授方法を習得してもらうことを目指して、拉致問題に関する授業実践事業を行っています。

対象 教員養成課程を有する大学と共同して実施。 **期間** 6月～翌年2月

実績

令和元年度	福井大学	教育学部の学生16名
令和2年度	京都教育大学	教職課程の社会科指導法、道徳指導法の学生19名
令和3年度	北海道教育大学	教育学部の学生13名

令和3年度に実施した北海道教育大学の「年間カリキュラム」

日付	場所	内容
6月28日(月)	北海道教育大学	授業説明会(オリエンテーション) 9:00～10:00 授業内容、スケジュールの説明 10:00～10:30 ビデオ「曽我ひとみ氏の講話」の視聴
7月14日(水)	北海道教育大学	拉致問題に関する集中講義①(内閣参事官 山口大治) 13:00～14:30 拉致問題についての行政説明(質疑応答含む)
7月26日(月)	北海道教育大学	拉致問題に関する集中講義② 9:30～10:30 拉致問題についての講義(北海道教育大学特任教授 山岡邦彦氏)
8月23日(月)	オンラインで実施	内閣官房主催の教員等研修への参加 13:00～13:20 行政説明(内閣参事官 大野祥) 13:20～14:00 拉致問題から人権教育を考える講義(学習院大学教授 梅野正信氏) 14:05～15:05 拉致被害者御家族 横田拓也氏の講演 15:10～16:40 帰国拉致被害者 蓮池薫氏の講演
9月28日(火)	福井県小浜市(1泊2日)	拉致現場視察及び帰国被害者の講義 10:30～11:30 帰国拉致被害者 地村保志氏の講演 13:30～14:45 拉致現場視察等(福井県警による説明)
10月～12月	北海道教育大学	指導案作成及び研究授業の実施 1. 授業において学習指導案を作成 2. 研究授業の実施、振り返り等
12月11日(土)	イイノホール (東京・内幸町)	政府主催国際シンポジウムに参加 13:00～13:30 大臣との車座対話 14:00～16:00 国際シンポジウムへの参加
12月12日(日)	ラジオ日本クリエイティブ・海上保安資料館横浜館 (神奈川県横浜市)	研究授業取組発表及び意見交換、海上保安資料館横浜館見学 9:55～11:35 大学から授業の実施状況について発表等 小学校道徳科、中学校社科、高等学校公民科 13:00～14:30 北朝鮮工作船等の見学
12月～2月	北海道教育大学	実施報告書作成

令和3年(2021年)度 年間カリキュラムのトピック



北海道教育大学

授業科目「地域プロジェクトIII」を受講する
13名(1、2、3年生)が参加しました。

6月28日 オリエンテーション

曾我ひとみさん(帰国した拉致被害者)の 講話をビデオ視聴しました

曾我ひとみさんは、1978年8月12日に北朝鮮当局により拉致され、2002年10月に帰国しました。一緒に拉致された母親のミヨシさんはいまでも安否が確認できないままです(北朝鮮は入境を否定)。ビデオでは、拉致されたときの詳しい状況や北朝鮮での暮らしについてお話されています。

知らないこと
ばかりでした



本当に拉致問題がある
のだな、と強く感じた。

苦しい経験の中にも、
私たちには想像できな
かった「普通の生活」
を知ることができた。

曾我さんが「北朝鮮の
人々は悪い人だけじゃ
ない」と話していたの
が印象的だった。

当事者の言葉を聞き、
ますます早急に解決
すべき問題であると感じ
た。



7月26日 拉致問題に関する集中講義②

研究者の話を聞き、 解決の難しさを理解しました

北海道教育大学函館校の山岡邦彦特任教授に、拉致問題の背景や解決が難しい理由などを多方面から説明していただきました。特に、一時帰国した拉致被害者の「永久帰国」の実現に尽力した当時の外交官の思いや交渉の過程を聞き、理解がさらに深まりました。

理解が
深まりました



拉致問題について整理
することができた。自分
でも調べてみたい。

「なぜ」という疑問が少
しずつ解けていくのを
感じた。

当時の外交官の思い
が印象的だった。永久
帰国の交渉や判断の
難しさを学んだ。



全国の小中高の教員、教育委員会の指導主事など745名が参加した オンライン研修に、学生たちも参加しました。

横田拓也さんが語る 「家族の思い」

横田拓也氏は、横田めぐみさんの弟で、北朝鮮による拉致被害者家族連絡会の代表。「国民が当事者意識を持つことで問題の深刻さをより理解できる」「過去の歴史ではなく、未来のことを考えてほしい」などと話しました。



当事者の話に
過酷さを痛感・・・



- 実際にご家族の話をお聴くのは初めてで大変衝撃を受けた。残された家族の被害も計り知れない。
- 長い間家族の帰りを待っているにもかかわらず、その願いが実現しないというのは本当につらいことだと感じた。
- 拉致問題が多発した1970～1980年代は私の両親が子供の頃。自分の身近にも起こっていた問題と捉え直した。
- なぜ北朝鮮側が拉致被害者の死亡を偽装したのか、疑問だったが、「北朝鮮の秘密を知っているから」との説明に納得した。
- めぐみさん本人だけでなく、ご家族の人生までもが北朝鮮によって壊されたことを改めて感じた。
- 自分事として捉えてもらうために自ら講演する姿にとっても心打たれた。私たちができることを考えて行動したい。

蓮池薫さんが拉致被害の体験を 語りました

蓮池薫氏は、1978年7月、妻の祐木子さんと 柏崎市の海岸で北朝鮮の工作員に拉致され、2002年10月に祐木子さんとともに帰国しました。(写真は受講者の視聴画面を撮影)



拉致被害や
北朝鮮の実情が
よくわかりました



- 「恐怖の呪縛」という言葉が印象的だった。逃げたくてもできない、そのうち逃げようとも思わなくなる、ということに、改めて状況の過酷さを感じた。
- 蓮池薫さんの口から語られる実状は生々しく、本当に普段聞くことのできないお話ばかりで知見が広がった。
- いかにも北朝鮮に逆らえないか、思い知らされた。
- どのように拉致され、帰国できたのかを詳しく聞いた。
- 「夢と家族の絆は、両方お金で買うことができないものであり、それを失った」という言葉に胸が痛んだ。横田さんや増元さんの死亡が虚偽であると根拠に基づいて説明され、一刻も早い解決が必要という意識が強まった。

人権教育の観点からも 考えてみました

学習院大学の梅野正信教授は、人権教育の専門家として、法律上の根拠から、教育現場で実際に拉致問題についてどうアプローチするかまで、説明しました。



人権問題
としての扱い方に
気づきました



- 拉致問題は「拉致」「国交」などのキーワードに目が行きがちだが、人権の問題であると気づかされた。人権教育で拉致問題を扱うことは、問題を風化させないことにもつながると感じた。
- 実践事例なども踏まえた説明で、具体的に拉致問題を扱う際のイメージができた。
- 学習指導要領における位置づけがわかった。

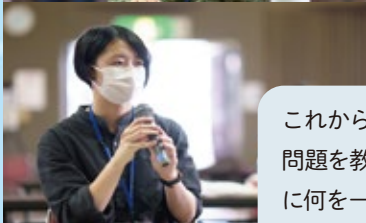
直接聞くと
問題が身近に
なった



地村保志さんと実際に会って話しました

地村保志さんは、1978年7月、福井県小浜市で作業員によって拉致されました。拉致されたときの状況や北朝鮮での生活、帰国してからどのような人生を送ってきたかなど、学生からの質問に丁寧に答えていただきました。

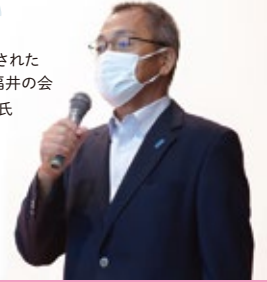
まだ多くの拉致被害者が救出を待っています。そしてその拉致被害者の帰国を待ちわびているご家族の想いというものを少しでも皆さんに感じ取っていただきたいなと思います。



私が拉致されたのは23歳の時でした。夕日を見ようと展望台に…(中略)振りむいた途端、口を塞がれ、手を後ろに倒され、手錠をかけられ、布袋をぱつとかぶせられたんですよ。一瞬の出来事です…

沖合で船を乗り換え、周りを見たら海ばかり。もうどこ行くやら、さっぱり分からない…。

北朝鮮に拉致された日本人を救う福井の会
会長 森本信二氏



これから教員になって拉致問題を教える際、子どもたちに何を一番伝えればよいですか？

拉致問題は皆さんが大人になったころには一つの歴史として残ってしまうんですね、教科書に。拉致問題は解決していない、ということ伝えてほしいです。被害者が生きている可能性がある今、救出活動をしなればいけないんです。

- 実際に拉致された状況を聞いて恐怖感を覚えた。「新聞やテレビの中のこと」「昔の出来事」という感覚がなくなった。これからの模擬授業に生かせると感じた。
- 拉致された本人だからこそ語れる内容で、若い世代に伝えていく上で何を重視するか、どのように広めていくかを考えながら聞いた。
- 拉致されたときの様子などを詳しく聞いたのが良かった。早期解決の必要性を心から感じた。
- オンラインと違い、やはり直接会って聞くと、本当に現実起こったことだと初めて本当の意味でわかった気がした。
- 拉致被害者の方がこの問題について率直にどう考えているのか、知ることができた。
- 「今の子どもが政治家になってからでは遅い、今やらない」という言葉が強く胸に刺さった。若い世代も一致団結して、署名活動などで声をあげなければならないのだという義務感を持った。
- 拉致問題がなぜ何十年経っても解決できないのか、難しさを改めて感じた。
- 北朝鮮の人の思想についても触れられていて北朝鮮という国への理解を深めることができた。

地村さんの拉致現場となった 福井県の小浜公園展望台に行きました。

地村さんのお話を聞いたあとに、拉致現場を訪れ、福井県警の方からどのように拉致されたのか、当時の状況をくわしく解説していただきました。



拉致現場に
実際に行ってみた



想像していたより
ずっと人目につかない
ところでした。



拉致現場に立って、
いかに恐ろしい事件だったか、
身をもって感じました。

私たちと
同年代だった時に
拉致され…
問題解決について、
真剣に考えました。



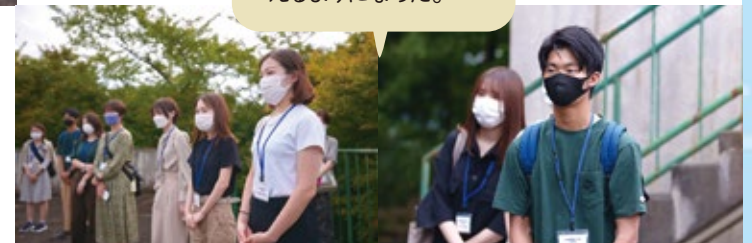
街灯の少なさや物陰の
薄暗さなど、足を運ば
ないと気づけないこと
があった。

私たちと同年代だった
地村さん達ご夫妻が47
歳まで拉致されたこと
を想像するとすごく怖
かった。

大切な人生の長い時間
を奪う拉致問題につい
て、解決のために何か
できないか、真剣に考
えるようになった。



警察が今も捜査を続
けている話を直接聞け
たのでとても良かった。



大臣との車座対話をしました。

松野博一内閣官房長官(拉致問題担当大臣)と、拉致問題を若者にどう啓発すべきか、意見交換しました。大臣は、「拉致問題という重大な人権侵害の問題を風化させてはいけない」と呼びかけました。

大臣と意見交換
しました



授業の指導案をグループ発表しました。

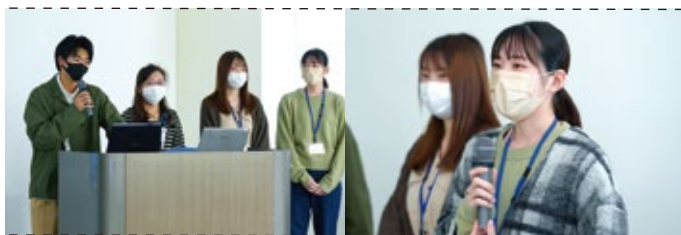
次世代を担う若者に対して拉致問題をどのように伝えていくか、小学校「道徳科」中学校「社会科」高等学校「公民科」の3つのグループに分かれ、大学内で実践した模擬授業を終えての所感・考察、学習指導案の発表を行いました。

学んだことを
共有しました



小学校「道徳科」グループ

「皆さんにとって大切な人は誰ですか」「大切な人と離れ離れになることを考えたことがありますか」と問いかけ、拉致問題が自分と無関係ではないというメッセージを込めました。



中学校「社会科」グループ

拉致問題を知らない生徒にも理解しやすいよう、導入でアニメ「めぐみ」の冒頭部分を用いました。めぐみさんと生徒たちが同年代であることを強調し、当事者意識で考えほしいと思いました。

高等学校「公民科」グループ

自分の考えの言語化が重要と考え、手紙を書く個人ワークを実施。宛先は「拉致被害者の家族」「日本政府」「北朝鮮当局」「帰国できていない拉致被害者」から1つ選び、宛先が同じ生徒同士でグループワークを行いました。



全体講評



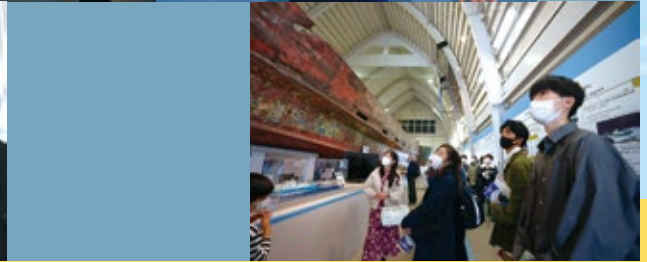
山岡邦彦 北海道教育大学特任教授による講評

皆さんが編み出した学習指導案が借物ではなくて、自分たちの頭で考えて、具体化していったものである、と思いました。拉致の問題は現在進行形で、解決に長い時間がかかっていること、私たちが主体的に行動していかなければいけないことが基調となっていた点は高く評価したいと思います。ここまでできると正直思ってもみなかったです。本当によく頑張ったと思います。

海上保安資料館横浜館で 北朝鮮工作船などを見学しました。

展示されている中国漁船に偽装した北朝鮮の工作船には、2001年12月に鹿児島県奄美大島沖での海上保安庁の巡視船との生々しい銃撃戦の跡が残っています。

北朝鮮の工作船が
事実を伝えています



教員を目指す大学生が自ら学び 次世代に伝えていくために

～研修を終えて～

拉致被害者の話を実際に聞くことができたこと、拉致現場を視察できたことは人生で忘れない経験になると思います。

教育者として次の世代に北朝鮮拉致問題を教えるに当たって、より専門的な知識と経験を得て、正しい教育に役立てるものだと理解しています。

「拉致」の部分だけでなく、北朝鮮の文化や政治的な側面などをもっと詳しく知りたいと思った。

この事業に参加するまで、公民の教科書を読んだら拉致問題を知っている気になっていましたが、講義や視察を通して早急に解決する必要性を強く感じ、今の自分に何かできることはないのかもどかしく感じています。

拉致の現状をもっと多くの人に伝え、国として動き出さなきゃいけないと思った。

将来教壇に立つことを目標としている身として、どのように拉致問題を語り継いでいけばか考えていきたいです。

